

## 第22回 コムズフェスティバル 市民企画分科会 実施報告書

グループ名	ウエルエイジングクラブまつやま
開催日	2021年2月3日
テーマ	「友白髪」「認認介護」「一人暮らし」の落とし穴 ～尊厳に満ちた老後を過ごすために～
形式	参加型学習会：ミニ講演とトーク&トーク
講師等	講演講師 菅野 慎二さん 桑原・道後地域包括支援センター長 意見発表者 向井 美佐さん・渡邊 笙子さん・森山 加代子さん
<p><b>〈内容〉</b></p> <p>長寿社会を迎え、高齢単独世帯や高齢夫婦のみ世帯が増え、高齢の親と未婚の子世帯を加えると約8割を占めています。こうした高齢世帯は家庭内に介護支援者を期待しにくく、日々老化し様々な課題を背負う高齢者の安住の場とはなりにくい現実があります。後期高齢者人口が増える中、地域包括支援センターを核とした在宅介護に重きをおいた施策が進められていますが、高齢世帯の内実は実に危うい状況にあります。夫婦円満の極みのように言われる「友白髪」、二人合わせて一人前と言われる「認認介護」、寂しいけれど自立し勝手気ままな「一人暮らし」も実は「高齢者の尊厳」を脅かしつつ成り立っていることを直視する必要があります。</p> <p>本分科会ではその現実を3人の意見発表から読み取り、超高齢社会の地域福祉の切り札として提唱されている「地域包括支援システム」を活用して高齢者自身が「自分の尊厳」をどう守っていくかを考えるきっかけとするために企画したものです。</p> <p>残念ながら、コロナ蔓延の余波にのまれ、参加型学習会の形での実施は見送らざるを得ませんでしたが、分科会参加を希望いただいた方々に向けて分科会資料をお送りすることで開催の趣旨に代えさせていただきました。</p> <p><b>〈まとめ〉</b></p> <p>3人の意見発表をインタビュー形式に代え、それぞれの対応と問題点を浮き出すようにまとめましたが、介護の社会化をうたった介護保険制度導入から20年、高齢期の介護や暮らしの支援が20年経ってようやく浸透してきつつあるのではないかという実感とともに、やはり介護は誰かの犠牲の上で成り立っているという印象を禁じ得ませんでした。いかに介護が社会化されても家庭内の役割は払しょくされず、とりわけ3人のご意見の底流に私たち世代が抱えている固いジェンダー規範を垣間見ることとなりました。</p> <p>一方、地域で地域の高齢者を支える包括システムが地域に在住する高齢者の尊厳を守る方策として機能するためには、まだまだ高齢者自身の理解が追い付かず、自分の尊厳を守るためのツールとして認識し、活用する段階には至っていないのではないかという思いでした。</p> <p>老いが誰かの犠牲の上に身を委ねざるを得ない現実だとしたら、高齢者自身が自分の尊厳を守るために何をどうしていくのか、そのためにはどのような支援を活用できるのかを改めて考える必要があることを実感する機会となりました。</p>	